


屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙



5

2022年ヤクザル調査を行いました！	02
調査員からのクーコール(5) 服部正道さん	04
調査メシ(5) レトルト〇〇	06
やくざる七つ道具(5) ラジオと天気図用紙	08
屋久島の森の住人たち(5)	10
やくざるなよんこま(5)	13
ぶらり屋久島(3)	14
解き明かす！屋久島の生き物の暮らし(5)	16
犬山より	18

2022年ヤクザル調査を行いました！

新型コロナの流行が始まった2020年は、定点調査の実施を断念しました。2021年は、実施形態をコロナ以前と大幅に変えながらも、とにかく初参加の定点調査者を入れて調査を実施することができました。だれか調査員がコロナになったら調査はそこでおしまいにするしかないという、強い緊張感の中で調査を行いました。3年目となる今年は、「感染者が出てても仕方ない」という気持ちでした。オミクロン株に置き換わって重症化することが少なくなったのと、わたしの身近なところで次々と、1年前よりはるかに多く感染者が出ていたからです。そして実際、その通りになりました。

調査の滑り出しは、とても順調でした。8月6日に最初の調査員8人が集合し、翌7日に、大川林道終点にテント場を設営し、午後には下見がてらシカ調査を行いました。そこからわずか2日で、調査対象群のうちHR群とPE群をカウントしてしまいました。その後に行ったOM群の調査



大川林道終点のテント場は、ブルーシートで作った集会場があるので、雨が降ってもだいじょうぶです。

はやてこずりましたが、ほとんど姿を見ることができずに3日ほどを経た後、ぶじ林道近くで長時間毛づくろいするところを観察して、カウントできました。観察者に馴れていないOM群は、例年もっともカウントに苦労するだけに、まだ調査日程は3分の1も終わっていないのに、8割方終わった気になっていました。

調査に暗雲が垂れ始めたのも、ちょうどOM群のカウントに成功したころのことでした。来島を間近に控えていた調査員から、コロナ陽性になったので参加を断念する、という連絡を、8月14日朝に受け取りました。翌日には、別の調査員が、7月にけがをした手の具合が思わしくなく、参加を断念。ふたりとも3回以上参加のベテランで、サルを追いかける統括者が二人も欠けるのは痛手でした。

8月18日、早朝から雷を伴った大雨が降りました。それまで11日間、ときどき雨は降ったものの、1日も欠かさず調査ができていたため、このあたりで1日くらい休もうということになり、全員好和荘まで下山することにしました。翌日も、調査に行く準備をして4時に起床したものの、天気が回復せずにとりやめ。その日の昼、3日前に入島したばかりの

調査員が、「のどに痛みがある」と言います。自前で用意しておいた抗原検査キットで調べてみると、(キットが古いせいか)はっきりとはわからないものの、なんとなく陽性のように見えました。保健所に連絡を取り、尾之間の診療所で診察をしてもらいました。結果は陽性でした。バックミラー越しに見えた、豪雨の中、看護師の方が傘をさしかけながら、先生が雨に濡れないように検体を採取している姿が、映画のワンシーンのように、わたしの記憶に刻み込まれています。

その後、濃厚接触者であるほかの7人は5日間、本人は9日間の隔離生活が始まりました。隔離できるような部屋を入れ替え、永田の京大観察ステーションにいる研究者の人たちに食料の買い出しを依頼したり、わたしの勤務先に連絡して指示を仰いだりしました。幸いなことに本人の症状はごく軽く、だれにも感染が広がることはありませんでした。隔離期間の間、プロジェクタを借りて、かわるがわる研究発表をしたり、アマゾンプライムで映画を見たり、筋トレしたり広島風お好み焼きを作ったりして、それなりに楽しく過ごしました。終わってみれば、長めの台風が来た程度で済みました。

その後、さらに2人の調査員が入島前にコロナ陽性になって参加断念したり、いつもの年だったらそれほどカウントに苦労しないSS群にてこずったり、YY群がバラバラになって動いていてカウントできなかったり、本物の台風が来て2日間停滞したり(このときも映画を3本見ました!)といろいろありましたが、なんとか目標にしていた、全定点3日間の調査を終え、5つの群れすべてをそれなりにはカウントできて、調査を終了することができました。

それまでずっと黙食を貫いてきましたが、解散前日の9月9日の夜、もう1週間新メンバーは参加しておらず、外部との交流もないことから、マスクを外しての会話を解禁しました。コロナ陽性の人から感染が広がらなかったのは、黙食をはじめとする対策をきちんとしていたからだと思えます。それを思えば、ファイナリストの自分たちだけ、談笑しながらすき焼きをつつくのはもうしわけない気持ちがしましたが(オリジナルメンバーが1食に一つだけ、大事に食べていたレトルトも、最後の方は大盤振る舞いで、一人二つ、さらに別にほかのおかずもあったりして、それももうしわけなかったですが…)、おいしいものを食べて「おいしい!」と言い、笑いあえる食事の楽しさを、身にしみて感じたのでした。

(半谷吾郎、1993-2022年参加)



隔離期間の最中、夜な夜な行った研究発表。

シカ調査は、定点近くに設置された4m×50mの区画の中に、どれだけシカの糞があるのかを数えるという方法で行っています。場所によっては、どうやって進んだらいいか、呆然となるほどの数に覆われていますが、そういうところにもシカの糞があったりします。

調査員からの クーコール

5

クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

服部正道

2014-2018 参加

「屋久島の、さらに奥へ」と書かれた素敵なポスター。

2013年の夏、大学の掲示板で見つけて、ここに行ってみよう!と思ったのがヤクザル調査隊との出会いでした。翌2014年に初参加して調査隊の面白さに魅了され、2年目には調査隊の装備を管理する装備隊長、3年目には定点の情報をもとにサルを追いかけてカウントする統括者として、深く調査隊に関わりました。ここでは調査隊での思い出と現在に至るまでの私について書かせていただきます。

美しく力強い屋久島の森、出会ったことのない愉快的仲間たちなど、調査隊での思い出は沢山ありますが、私がまず思い出すのは天気についてです。屋久島は日本でトップクラスに雨が降りやすい島として知られていて、山の上で9日間も生活する調査員にとって、天候はモチベーションを左右する重要事項かと思えます。私が初参加した2014年の後期は雨が降り多く、雨の中での野外活動の経験がほとんどなかったこともあり、雨の森の暗さや山の雷、晴れの偉大さなどすべてが新鮮で、気分が少しだけ高揚していたことを覚えています。でもやっぱり晴れがいいなと思い参加した2年目でしたが、山の上で太陽を見たのは入山日だけという始末。濡れたものは

二度と乾かない、食器にカビが生えるなど様々なことが起きました。6日目にジムニーで雨具を乾燥させた時の感動と香りは今でも忘れません。その後参加した時には、晴れあり、雨あり、台風ありの調査でした。様々な天候下で野外調査を経験したことは、その後の研究活動や仕事、私生活に大きな影響を与えることとなります。

私は大学院修士課程を修了した後、建設コンサルタント会社に就職し、測量部門に配属されました。面接で「長期間の野外調査の経験があり、テント生活にも対応できます」と言ったことが測量部配属の決め手だったそうです。測量に関する知識は大学の講義に「出ていた」程度でしたが、四季を通して現場に出て、夏は炎天下や大雨の中、冬は強風や雪の中で、天候への対応力を発揮しつつ、測量屋として経験を積んできました。

また、屋久島で山や島の魅力の虜になった私は、今でも休日は山に登ったり、自転車で峠を越えたり、離島へ旅したりと忙しくも充実した毎日を送っております。最近は雨の日を避けて出かけるようになりましたが、先日参加した自転車レースで久しぶりの大雨に遭い、雨に打たれながら林道でサルを待った調査隊の夏を思い出しました。昨今、様々なことがバーチャルの世界で体験できますが、現地に足を運び、実際に体感したことは鮮明に私の記憶に刻まれています。



藪に閉ざされた峠に挑む。

2012年からコロナ前の2019年まで、調査員募集のためのポスターを作っていました。調査員が撮った、とっておきの森やサルや調査員の写真、それに心をわしづかみにするコピーにひきつけられて、縁もゆかりもないのに参加を決心した人は多かったらしいですよ。

調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘をレシピとともに語ります。



南川未来 2021, 2022 参加

レトルト〇〇

コロナ前とコロナ後で、ヤクザル調査隊の調査メシは大きく変わったと聞きます。そもそも世に聞く”食当”というものは存在しません。コロナ対策の一環で、最低限の人数で部隊が構成されているからです。では現在はどうなっているかというところ…、寄付していただいたレトルトと下界からの手土産で成り立っています！今回はレトルトについて書かせていただきます。

レシピについては…、書くまでもありませんが、レトルトをあっためます！笑 下界と違うところといえば、もちろん電子レンジは使えないので“湯煎に限る”という条件付きであることでしょうか。あとは、お鍋で炊くご飯の重要性が増すことです。

レトルトの種類はいろいろあります。カレー、ハヤシ、親子丼、すき焼き、ビビンバなどなど。調査員それぞれが好きなレトルトを選んで、ご飯ができそうなタイミングで湯煎を始めます。今までのみんなで分け合うメニューと違って、個々に味が違うというのが一番の違いなのではないでしょうか？食べ方も人によって様々です。カレーやハヤシだと明らか

にコッヘルが汚れるので、半谷さんによってレトルトパックの方にご飯を入れるという方法が編み出されました。何人かマネする調査員たち。真似せずにご飯にカレーをかけて美味しくいただいている調査員に、ご自分の綺麗なコッヘルを見せつけてドヤッている半谷さんの顔、忘れられません…。どっちが美味しく感じるかは、その人次第ですね。

また、コロナによって生み出された新たな文化“黙食”。調査員はみんな真面目なのできっちり守ります。「美味しい」と言えないのが一番かなしいですよ。でもきっとみんな心の中では「美味しい」と叫んでるはず。

私は心の中でレトルト食品のことを“愛のこもったレトルト〇〇”と呼んでいます。なぜならこのレトルトたちはすべて、法人の会員や調査隊OBOGの皆さまからのご寄付だからです。ヤクザル調査隊は、支えてくださっている方々のご支援のうえで成り立っているんだなあということを実感しつつ、ありがたくいただきます。

しかし、現在のヤクザル調査隊調査メシは、それだけではありません。いまは少人数体制なだけあって人の入れ替わりが頻繁にあります。そういった新しくやってくるメンバーや休日だった人たちが、下界から手土産を持ってきてくれます。テノ場でビタミンに飢えている調査員たちは、その手土産に嬉々としています。その気になる内容は？きっと今後の調査メシで紹介されることでしょうか。乞うご期待！

余談ですが、今年の調査で、「ちらし寿司いいなー」「前はココアあったんですか?！」という話をテノ場でしていたら、私の下山日の夕食がちらし寿司+ココアでした。え、食べたいのに、帰らないといけない。。無念。次来るときはもっと長期参加ができますようにと心に願い。

今後、調査員が以前のヤクザル伝統メニューというものに出会える日はいつやってくるのでしょうか？新しい伝統文化がヤクザル調査隊には根付きつつあるのかもしれませんが。



コロナ前まで、食当は、定点調査員が日替わりで担当し、その日には調査はお休みでした。「食当=休日」だったため、自分の体力と相談しながら、調査期間中のどこで担当するか考えていましたね。同じ日に希望が重なると、ジャンケン勝負にもつれ込んだものです。

やくざる七道具

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

ラジオと天気図用紙

天気は、調査の成否を大きく左右します。インターネットがなかった時代も、翌日の天気については、天気予報がかなり確度の高い情報を伝えてくれました。ただし、ラジオの天気予報では、なぜそのような天気になるのかは、時間の都合上言わないことも多く、そうすると、「屋久島の西側の山の上」といった特殊な条件でどのような天気になるのかは予測が難しく、この先しばらくの天気も、はっきりとはわかりません。とくに、この先調査に大きく影響する、まだ発生したばかりの台風の情報は、かなり日本に近づくまで、知ることができません。そのために、ヤクザル調査隊では、ラジオの気象通報を聞いて、自分たちで天気図を書いていました。かつては得意な調査員がほとんど専属のようにして天気を書いていました。2001年ごろから、集合日に2時間ほどかけて天気図を書く講習を行い、食当が交代で天気図を書くことになりました。

気象通報の放送は、当時は1日に3回ありました。朝9時半、午後4時、午後10時です。食当の仕事は、前日の夜から始まるので、食当は、翌日の朝食と弁当の昼食の準備を済ませた後、ほかの人たちがいる集会場を離れて、ラジオで気象通報を聞きます。各地の天気、気圧、風力、風向、気温が読み上げられた後、低気圧や高気圧の位置、1本ないし2本の等圧線が、緯度経度で読み上げられます。台風や熱帯低気圧が発生すると、その後の予想位置も読み上げられます。ここを聞き逃すと天気図を書いている意味がなくなるので、必死になって聞き取ります。夜の放送の際には、なぜか鹿児島島のNHK第二放送は北朝鮮の放送と混線しやすくなり、肝心の

ところで、しばしばあの高らかなアナウンスに遮られました。

慣れた人なら、最初から天気図用紙に各地の情報を書き込めるのですが、たいていの人には「鬱陵島は・・・」と言われても位置がパッと分からないので、まずは図の横に情報を書き留めておき、あとで天気図に転記しま



天気図講習の様子。2008年。

す。読み上げられた等圧線と各地の気圧などの情報をもとに、滑らかな線になるように等圧線を記入していきます。風向は等圧線の走っている方向の参考になりますし、風力が大きいということは等圧線の間隔が短いことを意味します。そうしてできた苦心の天気図は、調査後のミーティングの際に披露され、あーでもないこーでもない、これからの天気について議論の材料になりました。

キャンプができなかった2009年を経て、2010年を最後に、天気図を書くのはやめになりました。すでに1999年ごろから、ドコモのiモードが、携帯電話で天気図を見られるサービスを開始していたのですが、当時の携帯電話は画面がごく小さいのと、個人の所有物だということもあって、調査隊としての使用はしていませんでした。ですが、タブレット端末とWiFiルータを備品に加え、調査地の中で携帯電話の電波が通じる場所に持ち込むことで、もっと手軽に、正確な天気図をすばやく手に入れられるようになりました。スマートフォンが普及した今では、電波さえ通じれば、雨雲レーダーやアメダスの情報まで見られ、もっと正確に天気を予測できるようになりました。

いつの間にか、気象通報の放送は1日2回に減らされてしまいました。ラジオは今でも調査隊の備品の中にありますが、緊急時以外、使われることはあまりありません。天気図用紙は、好和荘のどこかにあったのを、裏紙として、何かのメモ用紙に使われていたのを、昨年か今年か、見た記憶があります。2000年代までの参加者にとっては思い出深い道具ですが、その役目は終えたようです。

(半谷吾郎、1993-2022年参加)

天気図を書くのをやめてからは、講習で天気図を書くのに使っていた時間を、調査方法の説明にあてることにしました。それまでは、集合翌日の午後、暑さと眠気に耐えながら説明を行っていました。コロナ以降は、講習は集合前にオンラインで行っています。

屋久島の森の住人たち

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンウナギ以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

オオウナギ

Anguilla marmorata

屋久島では多くの川に生息する。2021年のヤクザル調査で、宿泊地のすぐそばを流れる二又川で、夜な夜なオオウナギを捕獲するための調査員の挑戦が繰り返された。

今年（2022年）7月、半谷さんからこの通信にオオウナギについて寄稿して、と依頼があった。半谷さんには、書くが、忙しい時期なので切ギリギリ（9月）に出すことになるかと返事をした。一方、文例については、過去の記事を参照して、とあったのでHPのリンクから、さらさら読んでみた。第3号、見覚えのある大田幸弘さんの顔写真をみて、記事を書くという気を直ぐに興せた。20数年も前に屋久島でやった研究なんて直ぐ思い出せないのが腰が重かったが、おもしろい動機が見つかった。

うなぎの仲間（ウナギ属-19種）は3大洋（太平洋、インド洋、大西洋）の熱帯から温帯に広く分布する。また、その繁殖のために大回遊を行い、外洋から陸水にいたる様々な環境でみられる特異な生態をもつ魚類である。オオウナギは、うなぎの仲間では最も広い分布域をもち、太平洋中央以西とインド洋の熱帯域にみられる。また、最も大型（最大全長180cm、最大体重28kg）になる種である。屋久島に生息するオオウナギは北西太平洋に分布する繁殖集団に属し、産卵場はマリアナ海溝の西方にある。マリアナ西方海域にはニホンウナギの産卵場もあり、この海域で産卵するオオウナギとニホンウナギはおおよそオーバーラップする地理的範囲に生活環をもつ。それで大田さんである。私は10年近く前の初夏、パラオに空路渡った。屋久島に流れ着く前のこれらうなぎの仲間の幼生（*Leptocephalus*）

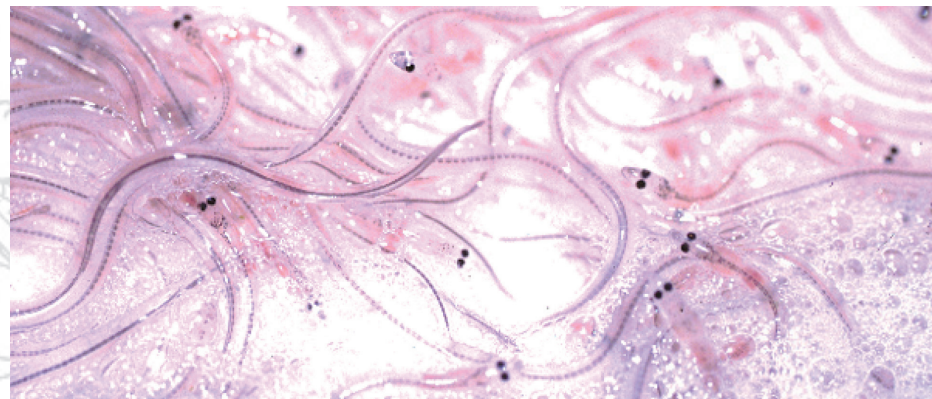


図1. 屋久島に遡上したシラスウナギ。写真はニホンウナギ。体表面には色素定着がほとんどなく、脊椎骨の色素がみえる。全長は6cm弱。

を調査するためマラカル港に停泊する水産庁漁業調査船「照洋丸」に乗り込み、首席調査員室に陣取った。その2日後、折しも台風が発生する海域へ向け、嫌な気分でもラカルを出港し、戦闘モードに気持ちを切り替えた途端、船長、船医と看護師の3人が私の部屋に駆け込んで来た。「大田さんがパラオ上陸中に犬に噛まれた様です」と船長。直ぐに狂犬病の危険を悟り、船医の説明を聞くまでも無くマラカルへ緊急入港しましょう、と言う判断になった。その後はもう忘れた。

私達が調査船で捕り逃がしたオオウナギやニホンウナギの幼生は海流に流され、やがて黒潮にのって屋久島近海までやってくる。おそらく屋久島近海で、幼生から変態したシラスウナギ（Glass Eel、図1）が、屋久島の河川に遡上して来る。オオウナギは周年ぽつぽつとやってきて、ニホンウナギは12月から翌年3月の遡上が多い。屋久島にシラスウナギとしてやってくるオオウナギとニホンウナギの年間比率（数）は1：9くらい。河川に遡上したシラスウナギは体表面の色素定着が進み、黄うなぎ（Yellow Eel、図2）となる。屋久島の河川における黄うなぎの生物量は圧倒的にオオウナギが多い（99：1くらい）。ニホンウナギは急峻な河川では留められないことが示唆される。しかし、河川勾配が緩やかで満潮時に海水が流入する宮之浦川、安房川、栗生川、永田川等の河口ではニホンウナギも見られる。たいてい屋久島を一周する県道が掛かる橋から見える上流の川面で、オオウナギの生物量がニホンウナギを逆転する。屋久島でオオウナギは標高1,000mくらいまで分布出来そうだ。屋久島のオオウナギは甲殻類

本稿を執筆した山本さんは、九州大学の大学院生だった1996年から4年あまり、屋久島の永田に住んでオオウナギの調査をしていました。同時期にサルの調査をしていた事務局長の半谷は、彼が耳石を採取するために捕まえたオオウナギを何度も食べさせてもらいました。

やサツマゴキブリを主食とし、数年から20数年間河川のトッププレデターとして君臨する。屋久島では秋にオオウナギの銀うなぎ（Silver Eel、図2）がみられ、降海して産卵場へ向かう。

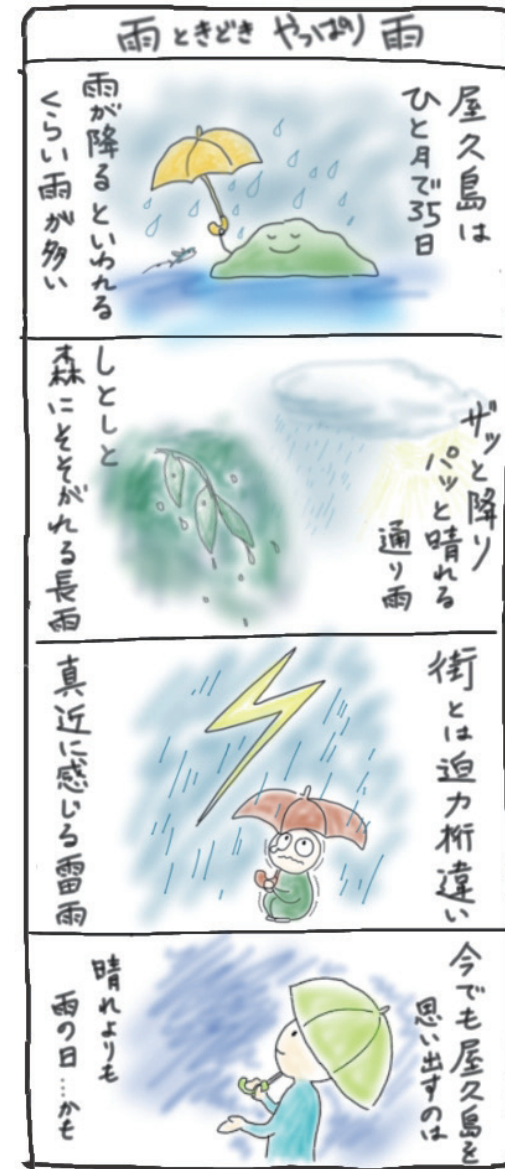
屋久島でオオウナギを捕まいたい男子諸君、「椋鳩十の本 第六巻 動物譚 南国動物記 - 屋久のうなぎ, 理論社」を読んでこの釣法に挑戦してみよう！アドバイス:オオウナギは眼前の動く物を捕食する。餌の“大きさ”よりも如何に活餌らしく見せるかが釣りのポイントである。注意:専門家の立場から言えば、椋鳩十の記載はオオウナギの捕食行動を甘くみている、つまりフィクションも入っており、良い意味でマイルドだ。うなぎの仲間の捕食行動は、噛みついたらワニの様に体を回転して餌を引きちぎるほど戦闘的である。また、常に餌不足の河川内では、大型のオオウナギは小型の餌も貪欲に捕食する。つまり、餌が“小さく”ても大型のうなぎは釣れる。釣れるうなぎが型揃いと言う事はない。ただし、釣れた最小個体の“口内サイズ”は“餌サイズ”と一致するかもしれない。しかし、この釣法の実践には覚悟が必要だ。釣りは男のロマン（ジェンダーレスの時代に怒られそう）だが自己責任で！ちなみに私は未だこの釣法を試していない。しかし、私は結婚した。子供も二人いる。生命保険もかけ、妻を受取人とした。さらに言えば、今のワークライフバランスのなかで他の女性に興味を持てる気力と金銭的余裕はなく、今後もおそらくない。上手く生き残ったとしても隠居出来れば良い。そろそろ私も“餌”を失う覚悟でこの釣法に挑戦してみても良い。

(山本敏博、1993-1994 参加)

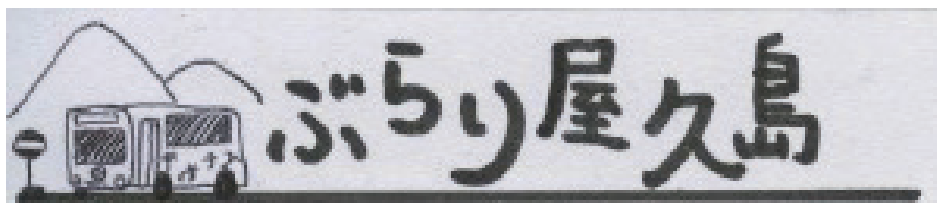


図2. 黄うなぎ（Yellow Eel:一番下の個体）と銀うなぎ（Silver Eel:上の2個体）。うなぎの仲間は成長段階によって、幼生（Leptocephalus:外洋での浮遊期間。柳の葉のようなたかちで無色透明）→シラスウナギ（Glass eel）→黄うなぎ（主に河川での成長期。腹部が黄色がかって見える）→銀うなぎ（外洋での産卵回遊に向けた形態。目の巨大化、胸びれの伸長、肝臓重量の増大、肥満度の増加、体色の黒化に伴う腹部の銀化がみられる）の順に形態変化する。

ヤクザルなよんま⁵



山本さんには、ウナギの調査に連れて行ってもらったことがあります。「半谷、調査の様子を写真に撮ってくれ」と言われて、自分も胴長を着て川に入り、山本さんが電気を流すと次々とぶかぶかと魚が浮かんでくるのを写真に撮りました。この調査は許可が必要なので、真似はしないでくださいね。



屋久島には、ヤクザル調査隊になじみの場所がたくさんあります。観光客とも、島民の方ともちょっと違う、調査隊目線で偏った屋久島のいろいろな場所のご案内です。



鹿之沢小屋

屋久島で最も高い宿泊施設と聞かれて何を思い浮かべるでしょうか。sankara hotel & spa? いわさきホテル? 確かにこれらは高いホテルですが、もっと素晴らしい「高い」施設が存在します。石塚小屋と鹿之沢小屋です。なにが高いつて、標高です。今回は、私が高さランキング1位だと勘違いしており、惜しくも50mの差で敗北したランキング2位の鹿之沢小屋を紹介いたします。鹿之沢小屋は屋久島北西部、永田歩道の標高1,550mに位置する山小屋で、小屋を囲むスギやシャクナゲやアセビの森を超えて登ってゆくと、1,700mくらいから辺り一面はヤクシマヤダケのササ原になります。そして、徒歩約1時間で永田岳山頂へ、標高1,936mの九州最高峰である宮之浦岳へ約2時間でアクセスできます。

遅ればせながら自己紹介となりますが、2015年から半谷さんの学生として入学していた本田と申します。1993年～1995年の好廣先生たちの

偉大な冬季の踏破調査や1997年のヤクザル調査隊の永田岳の定点調査がありましたが、詳しくわかっていなかった屋久島山頂部のサルの生態を調べるべく、2015年7月から鹿之沢小屋を拠点に2017年ごろまで屋久島山頂部で調査していました。

鹿之沢小屋は石造りの小屋です。内装は、使用禁止の焚火スペースを



2015年に破壊されていた扉。養生テープは頑張って補修しようとした痕跡。

中心として、上下左右の4面の板張りで構成されていました。私が2015年の7月に初めて、半谷さん、ネズミ調査の肥後君と共に鹿之沢小屋に入ったとき、窓が小さくて中は真っ暗だし、下段の板張りは左右両面とも一面黄色や白のカビだらけになっていて、ここは人が泊まる場所なのか、と衝撃を受けました。その後、私・肥後君・肥後君の友人（調査補助）の三人で高頻度で泊りに来ていたからか、小屋内の環境は改善し、床にカビが生えることはなかったのですが、あるとき下段部分の板張りが完全に崩れ落ちており、そりゃ脆くもなっているよな、としみじみ納得しました。小屋の扉も歴史ありです。もともと2015年時には引き戸だったのですが、立てつけが悪く非常に使い辛い扉でした。そしてある時、引き戸は何者かによって破壊されました。一時的にドアがない状態の時がありましたが、その後修繕されて、木製の開き戸になりました。

鹿之沢小屋は建てられてから半世紀以上経った古い小屋で、山岳信仰と深い関連を持っています。屋久島の集落はそれぞれ信仰している山があり、集落の人々が山の祠に毎年参りに向かう岳参りという行事があります。永田集落の人は永田岳を信仰しており、岳参りに参加する人たちは標高0mの海岸から砂を竹筒にいれて、鹿之沢小屋に一泊し、翌日山頂でご来光を望みながら、祠に竹筒を奉納します。

さて、鹿之沢小屋ボロボロ話を多々しましたが、それも今や昔、2022年7月に久々に調査で小屋に泊まったところ、なんと、外観はそのままで大改造劇的ピフォーアフターされていました！焚火スペースをなくすことで新しい床張りが広々として、ドアもステンレス（たぶん）製のモダンなドアに様変わり。小屋に入った瞬間の新しい木の匂いは、一生忘れられないと思います。普通はしんどいコースを選択しなければ鹿之沢小屋にはたどり着けません。でも、ぜひ来てください。きっと鹿之沢小屋もあなたを待っていることでしょう！いざ！

(本田剛章、2013-2022 参加)



2022年、改装されたピカピカの鹿之沢小屋の内装。木が新しくてまぶしさを感じます。

解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし 5

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

HR 群のサルたちは夏に遠くに行ってしまう!

半谷吾郎 1993-2022 参加

Hanya G, Yoshihiro S, Hayaishi S, Takahata Y. (2020). Ranging patterns of Japanese macaques in the coniferous forest of Yakushima: home range shift and travel rate. *American Journal of Primatology* **82**: e23185.

前号でご紹介した腸内細菌は、消化器官が特殊化していないニホンザルが、自分自身の体を作り替えずに、さまざまなものを食べるようになるための適応の一つです。腸内細菌の研究はお金がかかり、「最先端」な感じで、今の私の研究室の研究費獲得の目玉の一つです。ただ、地道にサルを追いかけて、行動を記録する、「昔ながら」の採食生態学者でもある自分は、「そういう研究もいいけど、賢いのが霊長類の本質なんだから、行動パターンを柔軟に変化させて、いろいろな季節に、異なるさまざまな食物条件に適応してきた、という研究もだいじでしょ」、とも思います。

前号で紹介した腸内細菌の発酵実験の論文がめでたく出版された2020年の4月、そういう自分の内なる声にこたえるべく、わたしは、ちょうど20年前の2000年4月から1年間の、長年の調査対象である、屋久島西部のヤクスギ林に住むHR群の遊動のデータの分析を始めました。

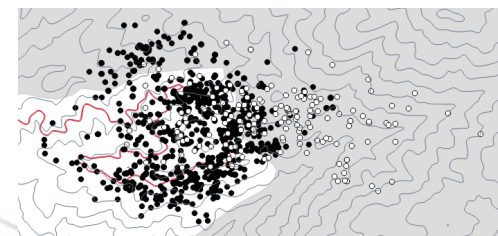
実は、この論文の結論は、分析する前から分かっていました。彼らの行動圏は、季節によって変わる、ということです。あのころ、夏になると、HR群のサルたちは、それまで主に使っていた大川林道の終点付近をはるかに離れ、林道も歩道も全くない、ヤクザル調査隊の調査域の東の原生林のただなかに移動してしまいました。たまに運よくHR群が林道近くに出てきたときに、必死についていきました。どんどん林道から離れていく

中、「この貴重な機会を逃さずに追えるところまで追いかけて」という気持ちと、「これ以上追いかけたら、自分は帰れないかもしれない」という恐怖の間で葛藤しながら、最終的には、まだ日没までずいぶん間のあるうちに追跡をあきらめ、戻ることになります。ある日には、追跡終了後に、標高差300メートルくらい上がり、そこから歩道沿いに500メートル下って、キャンプまで、2時間半以上かけてたどり着きました。ちなみに、当時はGPSはありません。地図とコンパスだけが頼りでした。

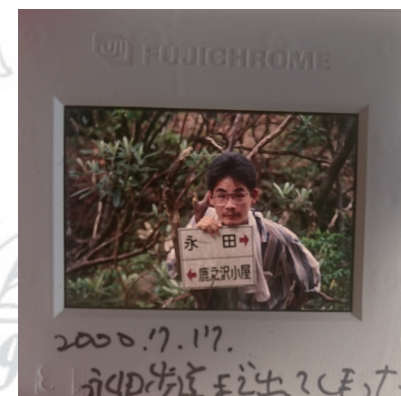
その後の調査で、この行動圏の季節変動は、毎年繰り返されていることが分かりました。どうもこの季節には、東側の、標高が高い原生林の方が、果実が多いようなのです。その時期に最も食物が多い場所を利用することによっても、彼らは次々に移り変わる食物条件の変動に対処していた、と、結論付けました。

結論ははっきりしていたのに、データの分析をするのに20年もかかったのは、当時のわたしには、位置情報を分析するスキルがなかったからです。この20年の間に、QGISという、フリーでもかなりの威力があり、オンラインでのチュートリアルも充実している地理情報システムGISのソフトが普及してきました。わたしも、研究室の学生だった栗原洋介さんにQGISを習得してもらった後、彼から習ったりして、少しずつ使えるようになってきました。今だから告白しますが、2006年に出版した論文では、行動圏面積を算出するのに、紙に印刷して、行動圏をはさみで切り取り、その重さから計算していました。時代は移り変わるし、わたし自身も変わるものです!

自分にとっての未経験の分野の論文を頭痛がするほど読み、頭が溶けるほど考えて書いた発酵実験の論文とは違い、こ



HR群が出現した場所。白い点が6月から9月、黒い点がそれ以外の月。赤い線が大川林道。灰色は原生林。



HR群を追跡した後、はるばる永田歩道まで出てしまったときに自分で撮影した写真。まだ若い。

この論文を書いていたのは、新型コロナによる第1回の緊急事態宣言が出て、出勤できずにひたすら自宅にいた時期でした。出張してデータを取ることも、実験もできないので、ずいぶん長いこと放っておいたデータを、何とかしようという気になったのでした。

の遊動の論文は、自分にとっても 20 数年来のなじみの分野だけに、とても気楽に書くことができました。4 月に分析を始め、超順調に、8 月の初めにヤクザル調査隊の調査が始まる前には受理されました。



皆さんご存知の通り、今年の 6 月 30 日に、ヤクザル調査隊を母体として、特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊を設立し、ヤクザル調査隊友の会の活動も、この法人に移行しました。本通信も、今号から「屋久島いきもの調査隊通信 瀬切の森からの手紙」と、名前を改めています。

2 月ごろから、たくさんの調査隊 OBOG のみなさんと何度もオンライン会議を開いて内容を検討し、4 月に設立総会を開催、5 月の連休明けに認証申請を行いました。6 月下旬に愛知県から認証され、6 月 30 日に登記が完了して、正式に発足しました。そのあともいろいろな役所への届け出、レンタカー事業の認可申請、銀行口座の名義変更、クレジットカードの作成、調査隊の車の名義変更…と、設立にまつわる作業はまだまだ終わりそうにありません。設立初年度は早くも 9 月 30 日に終わってしまったので、11 月の末までに、事業 1 年度目の事業報告をしなければなりません。複式簿記で会計報告をしなくてはなりませんし、さらに納税も待っています。全部きちんとできるのか、不安しかありませんが、法人の役員になった皆さんのほか、多くの方に助けてもらって、なんとかやっています。

今は、さまざまな手続きでいっぱいですが、法人になったことを生かして、これまでできなかった様々な事業に取り組んでいきたいと思っています。引き続き、皆さんのご支援をお願い申し上げます。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第 5 号
2022 年 10 月 10 日 発行
発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊
住所：484-0003 犬山市善師野伏屋 7 - 1
ホームページ：<https://yakushimaikimono.com/>
メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com
編集：上野尚久・半谷吾郎